

# 冬の室外保育

長谷川 増吉

妙高、南葉の山々の峯が真白になって、冬近い園の庭にたき火をかこんで子供達が三々伍々話し合っている。「お山に雪が来たよ」「うん。もうすぐ雪が降って来るよ。」「嬉しいなあ、雪が降ったらスキーに乗るんだ。」「僕はこんな大きな雪だるまを作るんだ。」子供達の冬への関心は大きい。冬はいやだと消極的に考えるのは大人で子供達は冬の生活に大きな期待を持っている。

早く十二月月上旬、おそい年で一月半ばかり降り始める雪は三月月上旬頃まで降りつづこうして冬の四ヶ月は雪に明け雪に暮れて太陽に恵まれない雪国の子供達、又戸外遊びを阻まれて経験領域の狭められる冬の園生活で幼児達が健康で明るい生活を送るため、どのような計画を立てるかということは、私共雪国の幼稚園にとって誠に重要な事である。

次に私たちの園の冬の保育計画の一端を述べてみたい。

## 十二月

お店ごっこ、クリスマスと室内の仕事も多いこの月ではあるが、雪の来ない前の一日一日のお天気は実に尊い。晴れた日はつとめて

園外へ出ることにする。

(遠足) 帽子はかぶらずにお辨当を持って出かける。冬枯れの山の様子を観たり、山の動物や植物の冬ごもりの話等しながら、充分に日光に当るようにする。

(落葉たき) 広い裏庭の遊園、落葉をはき集めて落葉たきをするのもたのしいあそびの一つ。たき火をかこんで和やかに話合う、お部屋で話さない子もぼつぼつと口がほぐれる。皆でお庭をきれいにするという協力的な態度も培かわれて行く。

## 一月

雪が降らないとお正月らしくないという。一夜で野も山も埋めつくして時ならぬ花をさかせて一面の銀世界となる。子供達は嬉しくてたまらないとはしゃぎ廻る。「雪やこんこんあられやこんこん」と皆歌い出す。

園生活一月の後半は「楽しい雪あそびをしましょう」という単元に入る。雪が大きな誘導の役割を果してくれるので苦勞無しに子供達は教師の計画の中へ入ってくれる。

## (目標)

一、戸外で雪あそびをして寒さに負けず元気

で遊ぶ生活態度を養い、健康の増進を計る。

二、雪でいろいろと大きなものを作らせて、協同でする大製作の面白さを経験させる。

三、雪道の通園に危険のないよう安全に歩行する態度や能力を養う。

#### (雪道の通園)

雪の日の朝、子供達はマントに雪をがぶつて雪だるまのようになって登園する。

登園前に園の入口を巾広く雪道を踏んで置く。職員早番が交代で入口に立っていて、子供達を暖かく迎え、雪をはらってやる。

一、雪道や雁木を大勢横に並んで歩かない。

二、道のない所をわけて歩かないようにする。

三、そりのじゃまをなしないようにする。

四、雪道をすべったり、遊んで歩かない。等皆で約束して安全に楽しく通園出来るようにしている。

雪が晴れて、一面の銀世界、雪の反射でチカチカと目が痛い。室内に遊んでいる子供達もさそい出して全部が外の遊園へ出る。全身的な運動量の多い雪あそびである。全身が汗ば

む位暖かくなる。お入りの合図があるまで夢中で遊ぶ。

。外へ出て遊ぶ時は幼児達の一人一人の健康状態に注意する。

。ぬれたものをそのままにつけていないように注意する。

。雪あそびの後はしもやけにならないよう、手、足、目をよくまさつする。

。室の中と外の温度の差に注意して調節する。衣類の乾燥設備等も整えて健康管理に留意する。

次に雪とあそぶ幼児の経験の主なるものをあげてみると、

#### (雪つり)

糸の先に炭をつけて、ふわふわとふり立てのやわらかい雪をつつて遊ぶ雪つり、だんだんと雪がついて大きくなって行くので面白い。工夫して余念なく遊んでいる。

#### (雪の結晶)

チラチラと舞い落ちて来る雪を虫眼鏡でのぞき、雪の花を見る。黒のラシャ紙と虫めがねを用意する。雪の花に対しての神秘と驚きの中に観察への興味と態度が養われ科学する心を育てる。

(雪ふみ、雪のお山すべり、雪だるま作り、おままこと、植木やさん)

よいしょ、よいしょと新しい雪をふみしめている子供、こすきで一生懸命お山を作つてすべりっこする子供、雪だるまをころがして

行ってだんだん大きな球に作る。皆で力を合わせて雪だるまの胸が出来る。頭をのせて、炭

の目玉を入れて、口がついて、松葉のおひげ

がついて出来上り、誰かに似たようなかわい顔のだるまさん。先生がバケツの帽子をかぶせて皆でアハハと大笑い。「出来た出来た

だるまさんが出来た」と皆で歌う。

皆で作った大切なるだるまさん、こわさないようにしよう。

#### (スキー、そり遊び)

雪が三十糎も積ると「先生スキー持って来ても良い？」と聞く。

何と云ってもスキーは冬のアそびの王様だ。裏のスキー場は豆スキーヤーであふれる。園へ来ている子供でスキーを持ってい

ない子供は無いと言ってよい位小さい時から好きならされているもの。

家から持って来て自由に滑らせているが勿論一斉に強制するようなことはしない。皆で

作ったお山で豆スキーに興じたり、裏の遊び場の傾斜を利用して滑らせているが、必ず教師が見守っていて、目の届かぬ所でさせぬように管理に充分気を配っている。

一組に十台ずつの園備えつけのスキーは、交代に仲よく使われている。

又、大型の雪そりが活躍する。お友達をのせて皆でひっぱって歩く。鈴がついていて、シャンシャンと走り廻って子供達を喜ばせている。

## 二月

二月に入ると雪あそびの経験領域も広まって、スケールが大きくなって来る。

### (雪合戦)

日本晴の空の下、綿雪をギュッキョッとふみしめて雪だまの投げ合い、勝負を主としないで元氣一ぱいあそぶ。体にぶっつけないように雪の城を作ってそれをめあてに投げるのも面白い。

### (雪まつり)

雪で人物、動物、お城、船等大きなものを作る。皆で協力して作る楽しさを味わう、遊びの中で幼児の創造性を培う所にこの遊びの良

さがある。充分に話し合いをして誘導しておいで入るようにする。教師が交友関係や、一人一人の子供の力を考えてグループを組むようにする。

丁度其頃、町で雪の芸術祭をやるので、大人の作品を見せてから入ると具合がよい。

(町の雪おろし風景、ラッセル車、ロウタリ車、雪かき自動車の活躍する様子を見る)

晴れた日等一組か二組ずつ交代に町の雪おろし風景を見せたり、駅へ連絡しておいで機会を見て、ラッセル、ロータリー車の活躍ぶりを見せる。

雪は私達をどんなに困らせているか。又人々は雪とこんな風に戦っている様子を子供達に理解させる。

## 三月

### (しみ渡り)

一しお寒気に明けた晴れた朝は、つもった雪の表面が固く氷る。朝の光を背に浴びて、ぎっしぎっしと一面の雪原の上を渡って歩く楽しさ、北極のペンギン鳥を思わせる。

### (雪けし、日向ぼっこ)

長い長い冬の自然は子供達にこのような経

験の数々を与えて三月で終止符を打つ。いとけるかと思つたこの雪も春三月の訪れと共に溶け始めて処々にあのみつかしい黒土色の地肌を見せて、青い青草の芽がのぞき始めたときの嬉しさ、南面している青田川堤にふきのとうがちよっぴり頭をもたげている解放的な春のよろこびは、雪国の冬を知るものものみのよろこびである。

園の庭では子供達が毎日サクサクとシャベルの音を立てて雪消しに精を出す。又日向ぼっこに、おしくらまんじゅうに生活の車はまわりまわって行く。(新潟県高田幼稚園)

## 誤 正

本誌第五十四卷十二月号山下俊郎先生御執筆の「幼児用の机と椅子について」の文中、左記のような誤りがありましたので御訂正致します。

### 誤 正

- 2 頁上段八、九行目 　　そうならば　　—　　いうならば
  - 同十一行目　　大きな　　—　　丈夫な
  - 3 頁下段一行目 害にも　　—　　高さにも
  - 同十二行目　　次の　　—　　右の
  - 4 頁上段一行目 　　次の　　—　　右の
- なお第五十五卷一月号目次中、新庄よし子先生の名前が新床よし子となっており、御訂正致します。